# 学校点描＋（プラス）

朝、道路を横断しようとする生徒のために、横断歩道のない場所でも車を停めてくださる方へ感謝のお辞儀をします。

《Ｋ中学校》

NO.4　　R4. 6.　2

担当：校長

5月31日（火）体育館天井の上部の割れた窓ガラスを高所作業車を使って修理してもらいました。雨が強まる中、高いところに登っての作業です。見ている方がはらはらしてしまいます。危険な仕事を、いつものことのように平然と作業している作業員の方の姿に頭が下がります。

同日午後に、交通安全母の会のＨ会長さんが、来校されました。昔は、保護者と担任との関係でしたので、昔話に花が咲きます。一緒にいらしたＳ課長は、学校の要望を真剣に聞いてくださいました。同行してくださった事務局のＥさんはわたしの教え子です。課長からＥさんの仕事っぷりを褒められると自分のことのようにうれしくて、「わたしの教え子ですから」なんて言ってしまいました。

帰りの車の中でラジオから、中学2年生の息子が親に提出した「反抗期届」の話を知りました。わが子からもらった“届出書”によると、自分が反抗的になる期間は7月末まで。「朝起こしに来なくてよい」「部屋の清掃は月1回」、家族での行事や外出については「その都度相談」と、期間中に親が干渉してもよいラインが細かく定められているそうです。

反抗期の自分の取扱いについて、親に届け出るなんて、大人には考えもつかない発想です。

## *親の苦労と子の成長*

３年Ｂ組の6月1日付けの学級通信には、家族へ生徒からの感謝のことばが掲載されていました。道徳の授業で思いやりと感謝について考えたそうです。「いつも傍にいて、勇気づけてくれてダメなことはダメって言ってくれて応援してくれてありがとう！」なんて書いてありました。

その日の夕方、帰宅すると久しぶりに山形市で看護師をしている娘が帰っていました。いただきものの“わらびのおひたし”を出すと大喜びしています。お互い、日々の生活で抱えた苦労話なんかは話をせずに、ばか話をしながら、時を過ごします。

ある本に、映画『山の郵便配達』の内容を紹介していました。その映画は、中国湖南省の山岳地帯を舞台にした映画で、人ひとりがやっと通れる険しい山道をひたすら歩いて郵便配達をする様子をドキュメンタリーにしたものなんだそうです。物語は、長年、徒歩で郵便配達を続けてきた父親が、足を患ったことをきっかけに息子が仕事を引き継ぐことになった話です。３日かけて120キロの道を歩きます。その途中にある村々に立ち寄り、郵便物を集配するのが仕事です。父は息子の初仕事に同行し、それを自分の最後の務めとしようとする最初で最後の親子旅の話です。

本を読んで気になっていたこの映画を、最近、偶然観ることができました。

---

冒頭、息子は郵便物がきっちり入った重いリュックを背負います。その後を無言でついていく父。長い間、父は仕事のために家にいなかったのです。そのせいで、父と子の絆は薄く、息子は父を「お父さん」と呼んだことはありませんでした。旅の間、無言で黙々と歩く二人でした。

ある村に着きます。全盲の老婆に軍隊に行った孫からの封筒を渡しました。中には仕送りが同封されていました。老婆は、お金を包んでいた白い紙を渡し、「手紙を読んでくれ」と頼むのです。

父は読みあげます。

「おばあさん、目はどうですか？腰の具合はどうですか？こちらは順調です。なかなか帰れないので困ったことがあったら郵便配達の人に頼んでください。」

老婆はそっとつぶやきました。「いつも同じだな」と。
　すると父は、息子に手紙を渡して、「続きはお前が読め」と言いました。
息子が手紙を見ます。

白紙でした。
息子は戸惑いながら、何も書かれていない紙を見て、「一人暮らしは大変だね。帰ったら一緒に暮らしましょう。」と続けました。
ああやって、何年も父は老婆に白紙の手紙を読んであげてきたんだ、そしてこれからは自分が読んであげなきゃいけないんだ、と息子は決心するのです。

川がありました。向こう岸に渡る橋はありません。息子は膝まで川に浸かって向こう岸まで渡り、リュックを下ろし、また戻ってきて父を背負い渡りました。
父は息子に背負われながら、息子が小さかった頃、息子を肩車して夜祭りに行った日のことを思い出し、溢れてくる涙を必死でこらえていました。
息子は、この冷たい川の水で父は膝を痛めたことに気づきます。そして、背負った父が郵便物より軽いことを知るのです。

この旅は、息子は自分の知らない父のことを、父は知らないうちに立派に成長した息子のことを確認する旅でした。

---

わが子が成長して、いつの日にか一人前になった時、親を超える大人になってもらいたいとは誰もが考えることでしょう。そのためには、子どもは親の苦労を知り、親は子どもの成長を認めてあげる、それを通した互いの信頼がなければだめです。ラジオで話題になった“反抗期届”は、親を信用しているからこそ、真面目に書いて提出したわけです。３Ｂのたよりも親を信じているからこその言葉が並びます。
日々の生活の中には、たとえ辛い仕事でも家族のためにたんたんと打ち込む、子の知らない親の苦労があり、家庭では見せない顔を学校でのぞかせる、親が知らない子の姿があります。

夜の会議を終え、家に帰宅するとテーブルの上には、「〇〇医院に行って診てもらってください。」とメッセージがあがっています。ばか話をしながら、「最近、体調が不調だ」と言った父の言葉を気にしながらアパートに帰ったのでしょう。

小さい頃に、娘の身長のしるしを刻んできた柱に、ありがたく貼っておきます。

きりとりせん

| ご意見・ご感想をお願いします。 |
| --- |
| |

Shinyatk1616n@yahoo.co.jp